卒業生の皆さんへ

不易流行

校長　横山　豊

大学時代に強く印象に残っている思い出に、京都の夏を象徴する風物詩である祇園祭があります。その後祭で登場する「大船鉾」の壮大で艶やかな造形美は、まさに圧巻でした。京都では宵々山、宵山の頃になると、前祭の山と鉾を組み立てる山鉾建てが行われます。職人が釘を使わず荒縄だけで部材を固定する「縄絡み」という技法が使われます。

2回生の夏の宵々山の晩であったと思いますが、河原町の画廊で毎年開催される美術部のグループ展の最終日が終わり、部活の仲間と祭りの準備を見学しながら歩いていました。そして偶然、夕方に山鉾建てが行われていました。とにかく近くで見たいという気持ちでいっぱいだったので、よほどジロジロ見ていたのでしょう。「お兄さんたち、そんなに見たいかい？」と逆に声をかけていただき、間近で仕組みや「縄絡み」の様子をじっくりと見せてもらいました。とにかく「すごい。」その言葉しか頭に浮かびませんでした。釘を全く使わず、細くて軽い木を組み込む技法は、究極の柔構造です。接合部分に幾重にも巻かれた縄は実に緻密で、まさに芸術の域にあります。山鉾一基で縄を5kmから7kmも使い、「大船鉾」の部材は400点を超えるそうです。

何年か前の新聞に、1100年余の伝統に飛騨の匠が貢献しているという記事が載っていました。なんと高山市の宮大工職人の工房が「大船鉾」の木製車輪を製作しているのだそうです。その大きさは直径2m、重量700kg。伸縮を加味した構造に、高山祭の祭り屋台で培った技が駆使されているとのことです。そして、昨年開催された大阪・関西万博のために企画・制作された空飛ぶクルマの試作機も、飛騨市のベンチャー企業によるものでした。温故知新にして不易流行。岐阜県、飛騨の人々は歴史絵巻と現代の祭典の両方で大活躍です。

「不易流行」は松尾芭蕉の言葉です。「奥の細道」の旅の中で体得した概念であると言われています。「不易を知らざれば基立ち堅く、流行を知らざれば、風新たならず」というものです。「不易」とは、いくら世の中が変わっても変えてはいけないもの、「流行」とは世の中の変化とともに変わっていくものという意味です。佐々木理事長先生のお話の中によく登場しますが、鶯谷中学・高等学校の建学の精神は「自立・自尊」。これはまさしく「不易」たるものであり、変わらないし、変えてはならないものです。しかし、時代は移り変わり、世の中も止まることなく変化し続けています。教育機関たる学校の役割は、不易たる建学の精神を基に、世の中や生徒の変化、つまり「流行」をしっかりと見据え、分析し、しなやかに柔軟に対応していくことであり、それが鶯谷中学・高等学校の進むべき道であると考えます。

1903年創立から125周年となる2028年、そして150周年となる2053年に向けて、やはり「不易流行」。鶯谷中学・高等学校は建学の精神のもと、常に変化・進化を続けていきます。